

# 竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER

その夢は、きっと世界を変えていく。  
*The dream surely changes the world.*



## Contents

- P.2 「現在の夢」、お礼の言葉
- P.3 第49回交流会レポート
- P.7 竜の子近況報告
- P.11 SPECIAL REPORT I



SPLレポートIより  
中国春節の年夜飯  
(大晦日の夕食)

- P.13 SPECIAL REPORT II
- P.15 SPECIAL REPORT III
- P.16 編集後記



第49回交流会レポートより（鳥取砂丘にて）

第 36 号  
Mar. 2026



公益財団法人 竜の子財団

## 現在の夢



リム・ヤンクアン

2007年来日  
2013年-2014年  
竜の子財団奨学生  
2007年-2010年  
長岡工業高等専門学校  
機械工学科 卒業  
2010年-2012年  
電気通信大学 知能機械  
工学科 卒業  
2012年-2014年  
名古屋大学 工学研究科  
機械理工学専攻 修士課  
程修了  
2014年-2017年  
アイシン精機(現:アイ  
シン)  
2017年-現在  
関東科学シンガポール  
勤務

幼い頃から多くの夢を抱いてきました。家族や周囲の方々の支えのおかげで、その多くが実現できました。日本の技術に強く憧れ、日本へ留学しエンジニアとして働くことを夢見ていました。高校卒業後、奨学金を獲得でき、日本留学に行くことができました。修士課程では、竜の子財団の支援のおかげで、学業に専念し、修士号を取得することもできました。誕生日にお祝いのお花を頂いたことや留学生同士の交流会に参加できたことなど竜の子財団の思い出は今も鮮明です。卒業後は日本での就職も叶いました。現在は日本を離れていますが、シンガポールの日系企業で働いています。日本で受けたご恩を、今は精一杯返すよう努めています。

私の現在の夢は、新たな知識を学び続けAIなどの新技術に適応し、世界で競争力を持つスキルを身につけ続けることです。大学を卒業することは、新しい知識を得る基本的な方法を教えてくれるだけで、技術の進歩についていくことはできません。日本を離れた時に学んだことです。日本で出会った同僚の多くは、卒業して会社に入れば学びの旅は終わったと考えますが、それは真実ではありません。全ての学生に伝えたいのは、学びは生涯続くものであり、決して止めてはいけないということです。困難に直面した時は、友人や竜の子財団の皆さんに頼ってください。きっと困難な時期を乗り越える手助けをしてくれるはずです。道はまだ長いですが、諦めないでください。竜の子財団の支援のおかげで、私は今、幸せな家庭と安定した生活を送ることができています。

最後に、竜の子財団の皆様改めて感謝申し上げます。これまでいただいた貴重な支援と思い出に心から感謝し、いつかこの恩返しができる機会を願っております。

### ご寄付いただいた皆様へ

この度、竜の子奨学生を代表して、ご支援をいただいている皆様に心より感謝申し上げます。

日本で学ぶ私たちにとって、皆様の温かいご支援は、ただの経済的な助けだけではなく、何よりも大きな「安心」となっています。学費や生活の心配をせずに、自分の専門分野の研究や勉強に毎日精一杯打ち込むことができるのは、皆様が私たちをいつも見守ってくださっているのおかげです。

また、竜の子財団主催の交流会に参加できることも、皆様のご支援があってこそだと深く感じております。こうした交流の場があるおかげで、普段の大学生活では出会えないような素晴らしい仲間と出会い、共に励まし合うことができます。皆様が作ってくださったこの「つながり」は、日本での留学生生活を支える一生の宝物です。

皆様からいただいたこの大きな恩恵を忘れず、将来は社会の役に立ち、日本と世界をつなぐ架け橋になれるよう、これからも一歩ずつ努力を続けてまいります。最後になりますが、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。誠にありがとうございました。

(令和5年度竜の子奨学生 東京電機大学 威 涵欽)

## 第49回交流会レポート

令和7年9月6日～7日、竜の子奨学生の第49回交流会は鳥取と島根で行われました。初日は鳥取砂丘や砂の美術館を見学し、梨狩りを体験した後、夜は三朝温泉の旅館に宿泊しました。2日目は島根に移動し、足立美術館の庭園鑑賞や堀川遊覧船でのお堀巡りを経て、最後に出雲大社を参拝しました。各地の食や文化に触れ、奨学生同士の絆を強める有意義な旅となりました。

交流会の当日11時頃、鳥取空港に到着すると、いきなりコナンくんたちが出迎えてくれました。鳥取砂丘コナン空港は、名探偵コナンの作者である青山剛昌先生の出身地が鳥取県であることにちなんで、2015年3月1日に正式にこの愛称が付けられた空港です。空港内にはコナンのモチーフやトリックアートなどの展示があり、名探偵コナンのいちファンとして嬉しい限りでした。私たち奨学生はここで記念写真を撮り、これから始まる旅への期待に胸を膨らませました。



コナンとの記念写真

空港を出て、バスで1時間ほど移動して、鳥取砂丘につきました。鳥取砂丘は、日本で最大級の砂丘であり、日本海から吹き寄せる風が長い年月をかけて形成した壮大な景観は、国内外から多くの観光客を惹きつけています。駐車場から砂丘へは少し距離があるため、リフトに乗って移動しました。私はリフトに乗るのが初めてで少し緊張しまし



鳥取砂丘頂上から見た景色

たが、ゆっくりと進む景色を楽しみながら砂丘へ向かいました。リフトを降りて砂丘の頂上へと進めると、柔らかい砂と照りつける太陽に足を取られ、思ったより進みにくいと感じました。しかし、一步一步進んで頂上にたどり着いた瞬間、目の前に広がる一面の砂丘の景色は想像の5倍にも感じられる広さで、心を奪われました。奨学生の皆さんも、頂上で写真を撮ったり砂丘の景色を楽しんだりしながら、思い思いの時間を過ごしました。

砂丘を後にして昼食に向かいました。昼食は豪華な海鮮料理で、どれも新鮮そのものの食材が使われており、ひとつひとつの味わいが素材の良さを引き立てていました。特に地元で獲れた魚介類は、噛むほどに旨味が口いっぱいになり、とても幸せなひとときでした。



一日目の昼食

昼食の後は「砂の美術館」を訪れました。砂の美術館は、世界で唯一の砂像専門美術館で、毎年テーマを変えて巨大な砂像を展示しています。今年の第16期展示は「砂で世界旅行・日本」をテーマに、日本の歴史や文化、風景を砂で表現した作品が展示されていました。砂像はそれぞれ異なる表情を持ち、繊細な彫刻で細部まで作り込まれた作品もあれば、あえて荒く削って力強さを際立たせた作品もありました。しかし、どの作品も圧倒的なスケールを持ち、その迫力は強く記憶に残りました。

砂の美術館を見学した後、私たちは砂絵作りの体験をしました。これは3色の砂を使って紙に砂を貼り付けて模様を描くアート体験で、塗り絵のような感覚で楽しめまし



砂の美術館



砂絵体験

た。奨学生の皆さんは思い思いの発想を展開し、3色だけを使ったとは思えないほど個性あふれるユニークな作品を次々と完成させていきました。

その後バスで移動し、15時頃に梨狩りができる梨園に到着しました。その場で収穫して味わう体験は初めてで、とても新鮮に感じました。収穫したての梨はみずみずしく、口に入れた瞬間に果汁が溢れるほどでした。私たちは「新甘泉（しんかんせん）」と「二十世紀（にじっせいき）」という2つの品種を味わいました。新甘泉はその名の通り甘さが際立ち、ジューシーで食べ応えがありました。一方、二十世紀はシャキッとした食感と少しの酸味が特徴で、どちらも魅力的な味わいでした。品種ごとに好みが分かれ、奨学生の間でも好みについて盛り上がりました。

梨園を後にして、私たちは三朝温泉（みささおんせん）



梨狩りする奨学生たち

の近くにある旅館へ向かいました。三朝温泉は日本有数のラジウム温泉として知られ、療養泉としても名高い温泉地です。旅館に到着し一息ついたあと、私を含め多くの奨学生が露天風呂に浸かりました。まず驚いたのは、旅館の温泉の広さです。開放感あふれる露天風呂に加え、やや熱めの湯や足湯など数多くの湯船が用意されており、さらにサウナまで完備されていて、まさに至れり尽くせりの設備でした。湯に身を委ねると、身体の芯からじんわりと温まり、日々の疲れがずっと溶けていくように感じました。

19時頃、楽しみにしていた夕食の時間になりました。旅館で提供された料理は、まるで芸術作品のような繊細さでした。旬の食材の味を最大限に生かした一品一品が絶妙なバランスで仕上げられており、今までに体験したことのない奥行きのある味わいでした。もし自分の国の知人が日本に来たら、ぜひこのような日本ならではの繊細な料理文化を一度体験し、その感動を共有したいと思いました。



一日目の夕食

夕食を終えて客室に戻ると、布団がすでにきれいに敷かれており、まるでアニメで見た修学旅行の一場面そのもの。思わずテンションが上がってしまいました。客室の窓側に目を向けると、美しい夜景が広がり、星空の下に温かな光に溶け込む民家の風景は、まるで一枚の絵画のようでした。

しばらく休憩した後、奨学生の一部で集まって少しゲームを楽しみ、笑い声が部屋に響く中で一日を締めくくりました。



旅館で見た夜景

(担当: 令和5年度竜の子奨学生 東京電機大学 戚 涵欽)

翌朝温泉旅館を出発する際、竜の子奨学生の全員で記念写真を撮影しました。晴天にも恵まれ、本日の行程も順調に進むことを予感させる一日の始まりとなりました。笑顔とともに、次の目的地へと出発しました。



温泉旅館前の集合写真

まずは鳥取県から島根県へと移り、最初に訪れたのは足立美術館です。途中、「名探偵コナンに会えるまち」として知られる北栄町を通過しました。北栄町は中国でも非常に人気の高い観光地であり、町内では『名探偵コナン』の登場人物たちと記念写真を撮りながら、いわゆるスタンプラリーのように巡ることができます。今回は残念ながら滞在時間が限られていたため、ゆっくりと見学することはできませんでした。



コナンのブロンズ像

足立美術館は昭和45年、安来市出身の実業家・足立全康氏によって創設されました。近代日本画の巨匠・横山大観の作品を多数所蔵しており、そのコレクション数は日本屈指を誇り、約120点に及びます。また、同館が擁する日本庭園は、アメリカの日本庭園専門誌『ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング』による日本庭園ランキングにおいて、22年連続で第1位に選出されています。約1,000か所の名所旧跡を対象とした評価の中で、名実ともに「世界一の日本庭園」と称される存在です。

「枯山水庭」「白砂青松庭」「苔庭」「池庭」など、庭園は

多彩な表情を見せ、歩みを進めるごとに静謐で雅な風景が広がっていました。館内で鑑賞できる日本画の名品と相まって、訪れる人々の心を静かに癒してくれる空間となっていました。筆者は現在、東京藝術大学に在籍する学生ですが、横山大観が晩年に病を抱えながらも創作を続けた姿勢には、深い感動を覚えました。また、その生涯を通じて真摯に向き合える仕事を持っていた点にも、心を打たれました。



足立美術館の庭園

足立美術館を後にし、バスは高速道路を走りました。車窓からふと目を向けると、遠くの麦畑の中を、強い日差しを受けながら、自転車を力強くこいで前へ進む少年の姿が目に入りました。遠くに連なる青い山々、広がる麦畑、静かに佇む木造の家、そして少年と自転車。その光景は、まるで青春そのものを映し出しているように感じられました。

本日の食事は、高級な焼肉料理でした。島根県産の和牛と、地元産のフルーツを使って絞ったジュースを味わいながら、暑い夏の日にもかかわらず、ひとときの涼やかさを感じることができました。柔らかくジューシーな和牛を白米とともにいただき、冷えたジュースを口に含むと、まさに夏らしい食事のひとつとなりました。食事の席では、地域ごとの食文化について知る機会もあり、大変興味深いものでした。食後にはデザートとしてアイスクリームもいただき、疲れた身体が次第に回復していくのを感じました。



焼肉の風景

午後はまず堀川遊覧船を体験しました。堀川遊覧船は、松江城を囲む城下町の堀川をめぐりながら、船上から町の歴史や風景を楽しむことができる観光船です。低い橋の下をくぐり抜けながら進む航路は、松江ならではの水辺の景観を間近に感じさせてくれました。

船上から眺める松江城や松江の町並み、水辺をめぐる草木や水鳥の姿からは、夏の気配が感じられました。ゆったりと流れる時間の中で、城下町として栄えてきた松江の歴史や、水とともに生きてきた人々の暮らしを想像することができました。

松江城は堂々とした佇まいで、ひととき存在感を放っていましたが、今回は残念ながら内部を見学することはできませんでした。松江城は、国宝に指定されている五城のうちの一つであり、その重厚な姿を水上から眺めることができた点も、遊覧船ならではの魅力であったと感じました。

また、川辺では時折、宮崎駿監督作品『君たちはどう生きるか』に登場する、不思議な老人の姿に変身するアオサギを思わせる鳥が飛び交う様子も見られました。残念ながら、変身する瞬間を見ることはできませんでしたが、水辺の静かな風景の中に現れるその姿は、印象に残る光景でした。



松江城と遊覧船

本日の行程の最後に、島根県を訪れる際には欠かせない出雲大社を参拝しました。境内に足を踏み入れると、厳かな空気が漂い、日常とは異なる静けさに包まれていることを感じました。境内に入ってまず目に飛び込んできたのは、神楽殿に掲げられた巨大なしめ縄です。その圧倒的な大きさは、写真や映像で見るとはまったく異なり、実際に目の前に立つことで初めて実感できる迫力がありました。その存在感は、訪れる者に強い衝撃を与えるものでした。

調べてみると、しめ縄とは「神前または神事の場において、不浄なものの侵入を禁ずる印として張られる縄」とされています。このような規模のしめ縄が掲げられていることで、神域と現世との境界が明確に示され、強い神聖性が

視覚的にも体感できるように感じられました。その場に立つことで、不浄なものは決して近づくことができないのではないかと、自然と畏敬の念を抱きました。

御本殿は「大社造り」と呼ばれる日本最古の神社建築様式で建てられており、国宝に指定されている大変貴重な建造物です。切妻造の簡素で力強い構成からは、古代信仰の姿を今に伝える重みを感じられました。社伝によれば、太古の出雲大社本殿の高さは約97メートル、中古には現在の約2倍にあたる48メートルに及んでいたと伝えられています。平成12年には、こうした社伝を裏付けるかのように、直径約3メートルにも及ぶ巨大な柱根「宇豆柱（うずばしら）」が境内から発見され、出雲大社の歴史的価値の高さを改めて示す出来事となりました。千年以上前に、これほど巨大な木造建築が実際に存在していたことを想像すると、驚きとともに深い感慨を覚えます。当時の人々が、その金色に輝く壮麗な姿を仰ぎ見たとき、どれほど心を打たれる光景であったことでしょうか。

また、出雲大社の参拝方法は一般的な神社とは異なり、「二礼四拍手一礼」が正式な参拝作法とされています。実際にその作法で参拝を行うことで、この地に根付いてきた独自の信仰文化をより身近に感じることができました。出雲大社の特徴の一つとして挙げられるのが、境内各所に点在する数多くのウサギの石像です。参道や社殿の周囲など、思いがけない場所に佇むウサギたちは、それぞれ異なる表情や姿をしており、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

日本一の縁結びの聖地としても知られる出雲大社を前に、研究に打ち込む日々の中でも、人との出会いやご縁を大切にしていきたいという思いを新たにしました。



神楽殿前の集合写真

大変有意義な二日間となりました。今後、皆さんと再び交流できる機会を心待ちにしています。

(担当：令和7年度竜の子奨学生 東京藝術大学 劉 常民)

# 竜の子近況報告

## 「学びと日常のバランス」



好きなスポーツを通して、  
自分を取り戻す時間

ワナ ホン  
**Wunna Hone (ミャンマー)**  
立命館アジア太平洋大学

皆さん、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか。  
私は現在、卒業論文の研究に取り組んでおり、「FOMO（取り残される不安）」をテーマに消費者行動について研究を進めています。これまでの学びを土台にしながら、関心のある分野をより深く掘り下げる日々を送っています。  
また、今学期は履修科目が少なくなったこともあり、生活のバランスを意識するようになりました。昨学期までは授業に追われる日々が続いていたため、最近は一週に一度サッカーを行い、適度に体を動かしてリフレッシュしています。好きなスポーツを通して、心身ともに整える時間を大切にしています。  
気温の変化が大きい時期ですので、皆さんもどうぞご自愛ください。

## 「山野調査なのか、死亡探検なのか」



戸沢村の  
熊出没マップ

リュウ ジョウミン  
**劉 常民 (中国)**  
東京藝術大学

昨年世相を表す漢字として、京都・清水寺で「熊」が発表された。じつは私にも、熊にまつわる小さな物語があります。  
昨年11月ごろ、研究室が主導していた2025年度の地方仏像悉皆調査で、山形県の戸沢村へ向かいました。秋田県に近い地域なので、熊の出没がよくあります。そこで熊よけを用意し、内心びくびくしながら山野に点在する寺を歩き回りました。  
途中で猿の家族や、たばこケースの半分ほどもある巨大なスズメバチに遭遇しましたが、幸いにも熊とは出くわしませんでした。スズメバチが飛び出した瞬間、メンバー全員が叫びながら死ぬ気で逃げ出しました。いちばん遅れた人が「もしこれが熊だったら、ワシもう終わりだ!」とっていました。

## 「この度博士課程を修了いたしました」



竜巻のように  
旋回しながら  
二酸化炭素を  
分解している  
青いプラズマ

カク クンピョ  
**郭 錦表 (韓国)**  
東京科学大学

おかげさまで、この度無事に博士課程を修了いたしました。皆様の温かいご支援に、心より感謝申し上げます。  
博士課程の締めくくりとして、私の研究内容を五・七・五の俳句にまとめました。  
青色の（あおいろの）  
竜巻炎（たつまきほのお）  
気体裂く（きたいさく）  
この句は、私が研究してきた「プラズマによるCO<sub>2</sub>分解」を表現したものです。強力な結合を持つ二酸化炭素を“裂く”ようにプラズマによって一酸化炭素と酸素に分解される過程で励起された一酸化炭素から光る青色の光を想像しながら詠みました。博士課程での経験を土台に、今後は社会に貢献できる成果を出せるよう、一歩ずつ着実に歩んでいきたいと思っています。



東京出入国在留管理局

セキ カンシン  
戚 涵欽 (中国)  
東京電機大学

## 「ビザの更新」

在留ビザの変更のために東京出入国在留管理局（通称入管）に行って来ました。東京の近くに住む奨学生でしたら、きっとお馴染みの場所でしょう。今回は事前にネット予約をしていたおかげで、手続きは1時間もかからずに終わりました。コロナ禍の最中、同じ場所で4時間近く待たされたことがあり、改めて日常が戻って本当によかったと思っています。留学の資格から仕事の資格へと変わり、社会人になる実感がさらに増しました。プレッシャーも感じますが、新生活に対する期待も高まっています。



東京フォーラム

ジャヤスーリヤ ムディヤンセーラーゲー ヌラーシャー  
インドウミニー ジャヤスーリヤ (スリランカ)  
早稲田大学

## 「東京フォーラム」

東京大学が主催した東京フォーラムに参加しました。授業で学んだことがある教授がスピーカーとして参加していたので、このフォーラムに興味を持ちました。特に印象に残ったのは「脱成長」のセッションです。3人のパネルで資本主義や今後の社会の成長についてお話ししました。とても面白かったです。また、東京大学は広くて、古い木も多かったです。建物のデザインも面白くて、大学の長い歴史を感じました。参加できてよかったと思いました。



秋芳洞で見た  
初雪

ジョ モヨウ  
徐 萌陽 (中国)  
九州大学

## 「新年にあたっての近況報告」

皆さん、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。  
最近、卒論と最後の論文投稿準備に取り組んでいます。忙しい日々ではありますが、充実した時間を過ごしています。卒業を控え、山登りに行く時間が少なくなったため、最近はジムに通うことが多くなりました。  
先日は九州で今季初めての初雪が降り、その日に秋芳洞を訪れ、初雪を見ることができたのはとても幸運でした。  
これからも体調に気をつけながら学業に励んでいきたいと思います。  
皆さんもどうぞお体を大切にお過ごしください。



戸隠神社の  
雪景色

ヨウ カイブン  
叶 楷文 (中国)  
名古屋大学

## 「年末年始に長野への小さな旅」

最近、卒業に向けた準備で忙しい日々が続いておりますが、年末年始には少し時間が取れたため、長野県の戸隠神社を訪れました。雪に覆われた杉林の中を歩くのはとても寒かったけど、静かで美しい景色が印象に残っています。多くの粉雪を見るのは初めてで、長野がスキーの名所であることを実感しました。名物のアップルパイや山賊焼きも美味しく、良い気分転換になりました。



南禅寺の紅葉

シュウ ベイウェイ  
**周 沛韋 (台湾)**  
京都大学

### 「京都南禅寺の紅葉」

最近はずっと論文を書いていて、あまりどこかに出かけることもなく、資料を探したり原稿を直したりして過ごしています。載せた写真は、去年11月に京都で撮ったもので、紅葉で有名な南禅寺です。ちょうど紅葉がすごくきれいな時期で、今振り返ってもいい思い出です。新しい一年が、皆さんにとって無理なく、順調な一年になりますように。



軽井沢駅前

クー セラ  
**具 世羅 (韓国)**  
東北大学

### 「卒業を控えた一年の振り返り」

現在、私は三月の卒業を控え、論文執筆に取り組んでおり、忙しい日々を送っています。研究のまとめに苦労する場面もありますが、これまでの成果を形にする大切な時期だと感じています。

先日、所属研究室の合同研究会に参加するため、軽井沢を訪れました。さまざまな発表を通して新しい知見を得ることができ、また他研究室の方々と交流を深める良い機会となりました。年末には研究室で忘年会も行われ、充実した一年を締めくくることができました。



学会発表にて

ナディレ イスラムジャン  
**NADIRE SILAMUJIANG (中国)**  
京都大学

### 「修論と発表に駆け抜けた半年」

年明けまで修士論文の執筆と研究発表に追われる日々でしたが、先日、口頭答弁を終え、ようやく少し一息つけそうです。この半年は慌ただしい一方で、多くの成果と学びがありました。12月6日には埼玉大学で開催された経営史学会にて発表し、先生方や研究者の皆様から貴重なご助言を多数いただきました。

今年も一歩ずつ成長できる年にしたいと思います。皆さんも一緒に頑張りましょう！



はじめての  
ポスター発表

チョン ルイシヨン  
**庄 睿翔 (マレーシア)**  
東海大学

### 「卒論に追われる日々の中で」

ようやく実験のまとめが一段落して、私も卒論に追われる日々を過ごしています。研究室の同期も同じ状況で、毎日のように学校に集まって作業しています。卒論は大変ですが、みんなで一緒に頑張っているおかげで、前よりもみんなが深まった気がします。とはいえ、あと2か月もすれば何人も卒業してしまうと思うと、少し寂しい気持ちにもなります。

最近はいくつか発表の中で、論理的に相手に伝えることの大切さを強く実感しました。自分にはまだまだ足りない部分があることにも気づけて、それも含めて良い経験になりました。これをきっかけに、これからもっとレベルアップしていきたいと思っています。



夜の東京タワー

リュウ ソハン  
劉 楚帆 (中国)  
筑波大学

### 「年末年始」

昨年9月から日本語を教える非常勤講師の仕事を始め、2025年後半は忙しくも充実した日々でした。冬休みに入り、ようやくひと息つくことができました。年末年始は特に予定もなく過ごしましたが、年末に大学時代の友人と久しぶりに再会し、東京で一日過ごしました。その日、初めて夜の東京タワーを見ました。まるで灯りがともったように赤く輝き、とても温かく感じました。2026年が、社会人となる私にとっても皆様にとっても、喜びに満ちた一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。



高尾山

ヨウ ウキ  
楊 雨琦 (中国)  
東京大学

### 「高尾山に行きました」

皆さん、ご無沙汰しております。この半年は学会発表や修士論文の執筆など、新たな課題に取り組む日々が続きましたが、先日無事に論文を提出し、一段落しました。修論提出後、友人と高尾山を訪れ、晴天の中で良い気分転換となりました。研究の合間には、自然に触れる機会を作り、心身のリフレッシュを心がけることの大事さを再認識しました。忙しい日々が続きますが、皆さんもどうぞお身体にお気をつけてお過ごしください。



東広島市の冬

ニムラウィー ナッタパット  
Nimrawee Nattapat (タイ)  
九州大学

### 「新社会人としての生活」

皆さま、いかがお過ごしでしょうか。昨年の10月より、私は学生ではなくなり、広島のマイクロンメモリジャパンで新社会人として働いています。気がつけば、社会人生活も半年ほど経ちましたが、今でも毎朝こんなに早く起きる生活にはなかなか慣れません。それでも、職場の先輩方に丁寧にご指導いただきながら、少しずつ仕事の流れや責任の重さを理解できるようになってきました。学生時代とは全く違う環境ですが、自分が成長していることを実感できる毎日に、とてもやりがいを感じています。失敗することもあります、その一つ一つが学びだと思い、これからも前向きに挑戦していきたいと思います。本年もどうぞよろしく願いいたします。

(担当：令和5年度竜の子奨学生 筑波大学 劉 楚帆)



## SPECIAL REPORT I

### ● 同じ食材、ちがう味わい：日中食べ方のちがい ●

日本と中国は地理的にも文化的にも近い国ですが、食卓に目を向けると、思いがけない違いに出会うことがあります。日本での生活の中で私自身が驚き、面白いと感じた食の風景を通して、身近な食材から見えてくる日中の文化の違いを、少しでも紹介してみたいと思います。

#### トマトから見える、味覚のちがい

(日本：塩とマヨネーズ／中国：砂糖)

学会の懇親会で、日本人の友人たちと居酒屋に行ったときのことです。メニューにあった「トマトスライス」を何気なく注文しました。出てきたのは、塩やマヨネーズを添えた、いかにも日本らしい一皿。実はこれが、私にとっては意外な食べ方でした。

というのも、中国でもトマトスライスを使ったおつまみはよく食べられています。一般的には白砂糖をたっぷりかけて食べるからです。その話をすると、友人は「塩をつけると、トマトの味ははっきりして、甘みも感じやすくなるんだよ」と教えてくれました。なるほど、と思うと同時に、日本ではスイカに塩をかけて食べる習慣があることも思い出しました。どちらも、素材の味を引き出すための工夫なのかもしれません。

ちなみにトマトは、植物学的には果実に分類されます。花の子房が発達し、種子を含むという点では、れっきとした「果物」です。ただし甘さが控えめなため、日常生活では野菜として扱われることがほとんどです。中国では、この「トマトは果物」という感覚をそのままに、砂糖を加えて甘みを補う食べ方が親しまれてきました。よく冷やしたトマトに砂糖をかけると、皿の底に甘い果汁がたまり、夏にはとてもさっぱりして食べやすい一品になります。作り方も簡単で、子どもの頃のおやつとしても定番でした。

同じトマトでも、日本では素材そのものの味を際立たせ、中国では足りない味を補う。この違いは、どちらが正しいというより、食に対する考え方の違いを静かに映し出しているようで、とても面白く感じます。



日本のトマトスライス（塩とマヨネーズ）



中国のトマトスライス（砂糖）

#### 柿のかたさに、食感のちがい

(日本：硬い柿／中国：柔らかい柿)

秋になると、店先に並ぶ柿を見るだけで季節の移ろいを感じます。日本でも中国でも親しまれている果物ですが、日本に来てからひとつ気づいたことがあります。それは、日本では「硬い柿」が主流で、それを好む人がとても多いということです。

中国にも硬い柿が好きなお客はいますが、全体としては柔らかく熟した柿を好む人のほうが多い印象があります。私自身も子どもの頃から柔らかい柿を食べて育ち、硬い柿は「まだ完熟していないもの」という感覚がありました。最初は、この違いが不思議でなりません。

調べてみると、日本と中国で栽培されていた柿の品種が異なっていたことが分かりました。中国では、硬い状態の

柿には渋みが残りに、甘さも十分でなかったため、自然と柔らかくなるまで待って食べる習慣が根づいたのです。一方で近年は、渋みのない硬い柿の新品種が増え、保存や持ち運びのしやすさもあって、中国でも若い世代を中心に人気が高まっています。

昨年の秋、私も日本の硬い柿を使って、中国のSNSで話題になっている食べ方を試してみました。薄く切った柿にクリームチーズをのせ、黒こしょうを少々、仕上げにはちみつを少し。生ハムを合わせるのもおすすめです。どれもコンビニでも買える簡単な食材ですが、驚くほど高級感がある味わいになります。季節の柿が手に入ったら、ぜひ試してみてください。



中国のSNSで流行ってる、サクサク柿の食べ方

### 豚バラの皮による、作り方のちがい

(日本：皮なし／中国：皮付き)

日本のスーパーを歩いていて、もうひとつ印象的だったことがあります。それは、豚バラ肉のほとんどが皮なしで売られているということです。紅焼肉（上海風角煮）が大好きな私にとっては、正直少し悩ましい発見でした。

豚皮は汗腺があるため、下処理が不十分だとにおいが残りやすく、加熱時間が短いと硬くなってしまいます。日本では、こうした手間を省き、家庭で扱いやすくするために、

食肉処理の段階で皮を取り除くのが一般的だそうです。取り除かれた豚皮は、ゼラチンなどに加工され、別の形で食品産業に活用されます。合理的で、いかにも日本らしいやり方だと感じました。

一方、中国では、豚皮を長時間煮込んだときのぶるぶるとした食感そのものが好まれます。そのため、紅焼肉では、皮付きの豚バラ肉が使われるのが一般的です。脂身と赤身、そして皮が一体になったあの食感は、欠かせない魅力のひとつです。さらに、私の故郷南京では、豚皮が主役になる料理もあります。それが名物の皮肚面（ピードゥメン）です。豚皮の脂を丁寧に取り除き、下茹でして乾燥させたあと、高温の油で揚げると、スポンジのような多孔質の食感になります。これを青菜や中華ソーセージなどと一緒に炒め、麺の上のにのせると、スープや具材の旨味をたっぷり吸い込んだ一杯が完成します。もし南京を訪れる機会があれば、ぜひ一度味わってほしい料理です。



中国の皮付き豚バラで作った東坡肉（トンポーロー）

最近では、スシローが中国に進出し、上海では連日長い行列ができていますと聞きます。一方で、麻辣燙は日本でも人気を集めています。食べ方や好みには違いがあっても、「おいしいものを楽しみたい」という気持ちは、日本でも中国でも変わらないのだと、こうした光景を見るたびに感じます。

(担当:令和6年度竜の子奨学生 名古屋大学 叶 楷文)

## SPECIAL REPORT II

### ● 庭園の中で出会った、「ゆっくり」の二つのかたち——日中の庭園をめぐる ●

今回、財団の皆さまと一緒に足立美術館を訪れたとき、いちばん心に残ったのは「写真がどれだけ撮れたか」ではなく、庭園が人の時間感覚をふっと変えてしまう瞬間でした。大きな窓の前に座り、手入れの行き届いた松、きれいに敷かれた白砂、そして遠景の山並みを眺めていると、不思議と誰も急がなくなる。美術館の中を歩いているときも、廊下の先にふと庭が現れたり、別の窓から違う景色が切り取られて見えたりして、まるで建物そのものが庭園をゆっくり紹介してくれているようでした。スマートフォンを見る手も止まり、会話も自然と小さくなる。そこには、空間そのものが「少し、ゆっくりしていいですよ」と語りかけてくるような静けさがありました。



足立美術館の庭園（島根県安来市）

この体験を手がかりに考えると、中国の庭園——とりわけ代表的な蘇州園林——は、また別の「ゆっくり」を教えてくれる存在だと感じます。足立美術館の庭園が“額縁に収められた風景画”だとすれば、蘇州園林は“自分の足で入り込みながら読み進める物語”に近い。回廊を曲がり、門をくぐり、橋を渡り、視界がいったん閉じたかと思えば、次の瞬間に水面がひらける。景色が一気に提示されるのではなく、歩みとともに少しずつ開いていく——いわゆる「一步一景」の面白さがあります。庭園がこちらに「さあ、次はどんな景色が出てくるでしょう」と、かくれんぼを仕掛けてくるようでもあります。



網師園（もうしえん）の庭園（中国・江蘇省蘇州市）

さらに蘇州園林の魅力は、自然が“生活の中に置かれている”点にもあります。亭は眺めるためだけでなく腰を下ろすためにあり、回廊は装飾ではなく人を導くためにある。池のほとりは「近寄らないでください」という場所ではなく、むしろほんやりと水を見たり、友人と語らったりできる場所です。庭園は鑑賞の対象であると同時に、日常の手ざわりを保ったまま自然に触れられる「小さな世界」なのだと思います。



網師園の庭園

一方、日本の庭園、そして足立美術館の庭園は、見る者を“観る位置”へとそっと導きます。庭に踏み込むのではなく、室内から静かに眺める。松、石、白砂は絵画の要素のように緻密に配置され、余白の美しさが際立ちます。枯山水では、砂が海を、石が山を象徴し、要素は驚くほど少ないのに、眺めているうちに想像が広がっていく。「何も

ない」のではなく、「想像のための余地がある」。時には、庭園を見ているというより、自分の心の状態を映し返されているように感じることもさえます。心がざわついていると景色が入ってこないのに、落ち着いてくると細部の美しさが見えてくる——そんな経験をされた方も多いのではないのでしょうか。



網師園の庭園

日中の庭園を映画にたとえるなら、中国の庭園は、カメラが歩みに合わせて動く“長回し”のようです。歩けば景色が変わり、発見が生まれる。一方、日本の庭園は、固定されたカメラの前で光や影、季節がゆっくりと移ろう“定点の画面”に近い。中国の庭園が「入って、巡って、味わってください」と誘うのに対し、日本の庭園は「まず座って、眺めてみてください」と語りかける。つまり、日本の庭園では「歩くこと」よりも「立ち止まること」が体験の中心になるのです。どちらも自然を写し取ろうとしますが、その方法と距離感が違うのです。

もちろん共通点もあります。どちらの庭園も“ありのままの自然”ではなく、緻密に設計された自然です。限られた空間の中で、視線の導き方や構図を工夫し、実際以上の奥行きを生み出す。その上で、中国の庭園は文人の暮らしや人の気配を感じさせ、その一方で、日本の庭園には、静けさの中で自分の気持ちをゆっくり整えるような時間が生

まれます。ただ景色を見るというよりも、景色を眺めながら自分の心の状態にも気づいていく。忙しい日常の中で少し立ち止まり、自分の呼吸や感覚を取り戻すような、そんな時間を自然に生み出してくれる場所だと感じました。

足立美術館で庭園を眺めていたとき、誰かが小さな声で「どうしてこんなに整っているんだろう」とつぶやき、周囲がふっと笑った後、また静けさが戻りました。その軽い笑いさえ、庭園の空気を乱さないように丁寧だったのが印象的でした。庭園の価値とは、景観の美しさだけでなく、私たちに「急がなくてもいい時間」を差し出してくれることなのかもしれません。



足立美術館の庭園

蘇州園林では、足取りが私たちがゆっくりにし、足立美術館では、まなざしが私たちがゆっくりにする。生活の中で自然に触れる「ゆっくり」と、静けさの中で自然を観る「ゆっくり」。二つの庭園文化に触れたことで、私自身、日々の忙しさの中にこそ、こうした小さな“速度の切り替え”が必要なのだと実感しました。足立美術館で感じたあの静かな時間は、庭園の中だけでなく、日常の中にも持ち帰ることができるものなのだと思います。次に心が慌ただしくなったときは、効率化の方法を探す前に、まずは一枚の窓、一枝の木、あるいは短い静かな時間を自分の小さな庭園として持ってみたいと思います。

(担当:令和6年度竜の子奨学生 九州大学 徐 萌陽)

## SPECIAL REPORT III

### ● 仙台の七夕祭り ●

仙台七夕まつりは、日本の代表的な夏祭りの一つであり、地域全体が協力して作り上げる大規模な文化行事である。長い準備期間をかけて制作される七夕飾りは祭りの中心的な要素であり、商店街や学校、地域団体など多くの人々はその制作に関わる。完成した飾りは街中に展示され、祭りを訪れる人々はその華やかさとともに、地域の伝統や文化を感じ取ることができる。

七夕飾りには、それぞれに古くから伝えられてきた意味が込められている。たとえば、吹き流しは織姫の糸を表し、裁縫や芸事の上達を願う象徴とされている。折り鶴は家族の長寿と健康、紙衣は災いを払い無病息災を願う気持ちを表す。また、巾着は商売繁盛や金運向上、投網は豊漁や豊作への願い、くずかごは清潔や儉約の大切さを意味している。このように、七夕飾りは単なる装飾ではなく、人々の願いや祈りを形にしたものであり、日本の伝統的な価値観を反映している。

東北大学では、留学生を対象とした七夕飾り制作の授業が行われており、学生が実際に祭りの準備に参加できる機会が設けられている。学生たちはグループに分かれてオリジナルの飾りを制作し、それらはキャンパス内に展示される。こうした活動を通して、学生は日本文化の背景や七夕飾りに込められた意味を実際に学ぶことができる。このように、教育機関が地域の伝統行事と密接に関わり、学生が祭りの一部を担う点は、仙台七夕まつりの大きな特徴である。

一方、韓国の大学でも毎年大学祭が開催される。韓国の

大学祭は主に学生が主体となって企画・運営する行事であり、ステージ公演や模擬店、クラブ活動の発表などが中心となる。学生同士の交流や大学生生活の活性化を目的としたイベントであり、学内コミュニティを強める役割を果たしている。

また、この時期の仙台は自然の美しさも大きな魅力である。市内から少し足を伸ばすと、青々とした山々や涼しげな滝、清らかな溪流など、豊かな自然景観を楽しむことができる。特に夏の山や滝は、暑さを忘れさせてくれる爽やかさがあり、祭りのにぎわいと対照的な静けさが心を落ち着かせてくれる。七夕まつりとともに、こうした自然に触れることで、仙台という都市の魅力をより深く感じることができる。

以上のように、仙台七夕まつりと韓国の大学祭は、ともに学生が参加する行事であるという共通点を持つが、その目的や規模、地域との関わり方には大きな違いがある。仙台七夕まつりは、七夕飾りに込められた伝統的な意味を大切にしながら、地域社会と学生が協力して作り上げる参加型の文化行事である。さらに豊かな自然環境とも結びつくことで、独自の魅力を形成している。一方、韓国の大学祭は学生主体の交流や娯楽を中心としたイベントである。この比較を通して、両国の祭り文化の特徴と価値をより深く理解することができる。

このようなさまざまな経験をする機会を得たことが今の自分を形作ったのだと思うので、これからも多様な文化体験を通して、日本や韓国だけでなく他の国々の祭り文化も経験してみたいです。



仙台七夕まつりの七夕飾り



左：夏の仙台の自然風景、右：仙台近郊の滝

(担当: 令和6年度竜の子奨学生 東北大学 具 世羅)



#### 委員長 東京電機大学 戚 涵欽

会報誌第36号の編集委員長を務めさせていただきました。私を含め編集委員の皆さんは論文執筆などで忙しい時期でしたが、力を合わせて素晴らしい会報誌に仕上げることができました。編集委員の皆様、本当にありがとうございました。私は第49回交流会レポートの制作を担当しました。制作中は思い出がよみがえり、とても楽しい気持ちで取り組みました。また、文章のチェックや誌面構成で親身に支えてくださった編集のプロの方、そしてこの貴重な機会をさせていただいた財団の皆様に、心より感謝申し上げます。

#### 委員 東北大学 貝 世羅

この度、「竜の子奨学生」会報誌第36号の編集委員として編集作業に参加させていただきました。大学に入ってから文学的な文章に関わる機会があまりなかったため、今回の編集部での活動はとても新鮮で興味深いものでした。特に、普段よく触れているアカデミックな文章とは異なり、個人的な考えや主観を書くことには最初戸惑いもありましたが、編集部の皆さんの助言のおかげで大きく成長することができました。また、編集委員の皆さんと協力して一つの会報誌を作り上げる過程は非常に楽しく、多くの学びと達成感を得る貴重な経験となりました。

#### 委員 筑波大学 劉 楚帆

この度、「竜の子奨学生」会報誌第36号の編集委員として編集作業に参加させていただきました。今回は、奨学生の近況報告のまとめを担当させていただきました。皆様に書いていただいた近況を拝見し、特に3月に卒業される方々の近況を読んでいると、自分が会報誌の編集に参加するのがこれで最後になることを感じ、少し寂しい気持ちになりました。今回も、加藤さん、編集のプロからのご指導や、ご協力いただいた奨学生の皆様のおかげで、作業は順調に進行しました。ありがとうございました。

#### 委員 東京藝術大学 劉 常民

この度、「竜の子奨学生」第36号の編集委員会に参加させていただき、ありがとうございました。私は交流会レポート二日目の執筆を担当しました。執筆中に体調を崩し療養を要しましたが、休養を挟みつつ原稿を仕上げることができました。病中で文章に向き合う経験は、これまで耳にしてきた作家たちの執筆の話の思い出させるものであり、自分にとって新鮮な体験となりました。また、編集委員の皆さんと一緒に協力することも非常に楽しく、多くの学びと達成感を得ることができました。このような素晴らしい経験をさせていただいたことに、心より感謝申し上げます。

#### 委員 名古屋大学 叶 楷文

今回で二度目の編集委員会への参加となり、心より感謝しております。まもなく竜の子奨学生を卒業いたしますが、卒業前に再び皆さまと編集活動をご一緒できたことを大変うれしく思います。編集作業にあたり温かいご助力をいただいた皆さまに深く御礼申し上げます。本号の編集も、私にとって忘れがたい大切な経験となりました。

#### 委員 九州大学 徐 萌陽

今回の編集を通して、島根県や鳥取県で皆さんと一緒に過ごした交流会の日々を懐かしく思い出しました。同じ時間を共有しながらお話したことや感じたことが、改めてとても大切な経験だったと感じています。また、その後にもまとめられた特別報告もそれぞれに個性があり、読んでいてとても興味深く、皆さんの取り組みや考えを知る良い機会になりました。編集作業をしながら、こうしてつながりを感じられることを嬉しく思います。本誌が、交流の記録として長く残っていけば嬉しいです。



第一回編集会議



第二回編集会議



第三回編集会議後にて



### 「その夢はきっと世界を変えていく」

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている  
その夢はきっと世界を変えていく 平和のため  
いろんな事があるけれども どんなときでも

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に  
夢 希望をかなえる為 みんなは生きている  
その夢はきっと世界を変えていく かならず